

上級レベルの中国語系日本語学習者と 韓国語系日本語学習者の敬語習得の比較*

広島経済大学 宮岡 弥生
広島大学 玉岡 賀津雄**

1. はじめに

中国語は、古代、儒教の価値体系によって支えられた豊かな敬語表現が存在していたと言われている。しかし、現代中国語において、儒教の礼法に基づく従来の敬語体系は、近現代中国の社会体制や教育システム、価値観などの激変によって消滅してしまっており、現在残っているのは親族呼称の転用、間接表現、人称代名詞の回避など発話ストラテジーによる丁寧さの表現である(彭, 1999)。したがって、現在では中国語は体系的な敬語表現を持たない言語であると言われている(彭, 1999; 興水, 1977)。

一方、韓国語は、敬語の発達した言語である。韓国語の敬語は、日本語と同様に、敬語的表現のための専用の言語要素が文法体系の中に組み込まれており(梅田, 1987)、それらは話し手と聞き手、および話題上の主体人物(=動作主)と客体人物(=動作の受け手)の4者に対する敬意で構成されている。そして、これら4者相互間の言語的待遇関係によって、対者待遇、主体待遇、客体待遇の3範疇に区分できる(徐, 1978)。この3範疇は、それぞれ恭遜語(日本語の丁寧語)、尊敬語、謙讓語と呼ばれることもある(安, 1981; 森下・池, 1992など)。この点も、日本語の敬語と同じである。

以上のように、日本語と韓国語は、体系的な敬語を有しているという点で類似している。これに対して、中国

語には日本語のような体系的な敬語はないと言われている。そのため、日本語の敬語の習得は、人間関係に応じて表現を使い分けることに慣れている韓国語系日本語学習者の方が、中国語系日本語学習者よりも容易なのではないかと予測される。先行研究において、このような日本語学習者の敬語習得に関して母語別比較をしたものはない。そこで本研究では、母語の敬語体系が目標言語である日本語の敬語習得に影響するかどうかを明らかにすることを目的とし、文法事項と人間関係把握の両面から、中国語系日本語学習者と韓国語系日本語学習者の敬語習得の度合いを比較することにした。

2. 方法

2.1. 被験者

被験者は、中国語系日本語学習者が24名と韓国語系日本語学習者が24名で、合計48名である。被験者は、日本語能力と年齢を基準としたペアマッチ・サンプリング(pair-matched sampling)によって中国語系と韓国語系の日本語学習者を一対ずつ同じ特性を持つ被験者同士を選択した。従って、日本語能力 [$t(46)=0.03, p<.98$] および年齢 [$t(46)=-0.89, p<.38$] における両グループ間の有意な差はない。日本語能力テストの平均点は、中国語系が43.08点(標準偏差4.94点)、韓国語系が43.04点(標準偏差5.63点)で、平均で0.04点の違いしかなく、ほとんど同じ得点である。日本語能力テストは50点が満点なので、本研究の被験者は、上級レベルの日本語能力を有している。日本語能力のレベルを上級のみに絞ったのは、中級以下のレベルの日本語学習者にとっては敬語のテストは難しすぎ、得点が低くなりがちで、敬語能力

* Differences in the acquisition of Japanese honorific expressions by native Chinese and Korean speakers with advanced Japanese ability.

** MIYAOKA, Yayoi (Hiroshima University of Economics) and TAMAOKA, Katsuo (Hiroshima University)

の習得を考察することが難しいからである。一般的に多くの日本語教科書において、待遇表現は構造化された学習項目として扱われておらず、意図的に学習の対象とされていない（ピッツィコーニ、1997）。したがって、日本語能力が上級であるからといって、敬語に関する知識も上級レベルであるとは言い難いのが現状であると考えられる。

本被験者の平均年齢は、中国語系が28年0ヵ月（標準偏差5年7ヶ月）、韓国語系が29年3ヵ月（標準偏差4年3ヶ月）である。男女別の内訳は、中国語系日本語学習者が男性11名、女性13名、韓国語系日本語学習者が男性10名、女性14名である。

2.2. 課題

課題は、尊敬語が36問と謙讓語が24問の合計60問である。これらの課題はすべて誤った敬語表現が用いられている文である。尊敬語と謙讓語とで問題の数が揃っていないのは、体系的に見て各カテゴリーが本来持っている敬語表現の数自体が異なっていることを考慮したからである。この他に、ダミーの問題の20問を加え、計80問を被験者に提示した。ダミーの問題は、分析の対象とする敬語とは異なるものを採用し、課題に影響を与えないように配慮した。課題文に登場する人物は、被験者、被験者の父、山田先生（男性・教授）、佐藤先生（男性・教授）の4人である。被験者には、被験者が山田先生と佐藤先生のどちらかひとりと2人だけで話すというコンテキストを与え、そのような状況のもとで課題文が用いられた場合の下線部の表現を正誤判断し、誤りだと判断した表現については訂正するよう指示した。課題文の登場人物4人のうち、山田先生と佐藤先生は、人間関係上、被験者が敬語を用いて待遇しなくてはならない人物である。荻野らが大学生を対象に行った調査（荻野・金・梅田・羅・盧、1990）でも、最も丁寧な接し方をするのが「大学の先生」であった。それに対して被験者の父は、規範的に見て、被験者が他人に話す場合には敬語を用いて待遇してはならない人物である。つまり、本調査で設定した登場人物は、敬語を用いるもしくは用いないこと

が、敬語使用上の規範から考えて明らかな人物のみである。敬語を使うかどうか微妙な対象は、本研究では扱っていない。これは、誰に対してどの程度の敬語を使えばよいか分かっているかどうかを明らかにすることが、本研究の目的ではないからである。そのため、敬語を使うかどうか微妙な対象を含まざるを得ない多様な人物設定を避け、前述のような登場人物とした。

本研究の分析対象とした敬語は、尊敬語の「一れる・られる」と「お一になる」、および、「いらっしゃる」や「召し上がる」のような敬語の交替形式（林、1999）の3種類と、謙讓語の「お一する」、および、「申し上げる」のような敬語の交替形式の2種類である。敬語の交替形式とは、例えば動詞「食べる」そのものを取り替えて「めしあがる」と言う類のものである。

課題文の難易度を統一するために、誤り表現を構成する動詞は、すべて初級の段階で学習する単語とした。また、文法事項、自己・身内敬語、他者敬語の三者間で、誤り表現を構成する動詞の活用が課題文の難易度に影響を与えないように、訂正課題の該当個所で用いる一段活用動詞と五段活用動詞の数は、各グループで同数とした。なお、本研究においては、中国語系と韓国語系の両者に対して同一の問題を使用したため、各課題が被験者に与える影響は同じである。

本研究で被験者に提示した尊敬語と謙讓語の誤り表現は、表1に示したように、(1)文法事項、(2)自己・身内敬語、(3)他者敬語の3つの観点から作成した。(1)文法事項は、動詞の接続や活用といった文法的な事柄の習得の度合いを見るためのものである。(2)身内・自己敬語は、人間関係の把握の中でも特に敬語の一人称（菊地、1997）に関する規則を習得できているか、つまり自分自身や自分の家族のことを他人に話すとき敬語を使わないという規則を習得できているかを問うものである。(3)他者敬語は、同じく人間関係の把握のうち、自分や自分の家族以外の目上の人に対する適切な敬語の使い方を習得しているか否かを問うものである。これらをさらに、待遇の対象によって「第三者」と「非第三者」の2つに分けた。

表1 訂正課題文の例

誤りの種類	待遇の対象	課題文の数	訂正課題文の例
文法事項	非第三者	6	山田先生、駅までタクシーにお乗られになりますか。
	第三者	6	山田先生は、駅までお歩かれになります。
尊敬語	自己・身内敬語	6	私は、昨日、3時間本をお読みにになりました。
	第三者	6	私の父は、車を買うことをお決めになりました。
他者敬語	非第三者	6	山田先生、今朝、コーヒーを飲みましたか。
	第三者	6	その写真は、山田先生が撮りました。
文法事項	非第三者	4	私は、昨日、山田先生からその本をいただき申しました。
	第三者	4	私の父は、佐藤先生から本をいただき申しました。
謙譲語	自己・身内敬語	4	山田先生は、昨日、私に電話をおかけしましたか。
	第三者	4	佐藤先生は、昨日、私の父に本をさしあげたそうです。
他者敬語	非第三者	4	昨日はおいしいケーキをもらいまして、ありがとうございました。
	第三者	4	私の父は、佐藤先生に手紙を出しました。
合計		60	

注: 下線部は敬語の誤り表現である。

「第三者」とは、話題の中に登場する、発話場面に居合わせない人物、「非第三者」とは、それ以外の話し手と聞き手のことである。

例えば、表1のうち、「文法事項、非第三者」の課題文である「山田先生、駅までタクシーにお乗られになりますか。」の下線部は、動詞「乗る」に尊敬表現の「お一になる」が添加した「お乗りになる」の誤り表現である。このとき、待遇の対象は、話し手である山田先生である。この山田先生を第三者とし、話し手を佐藤先生とした場合には、例えば、「山田先生は、駅までお歩かれになります。」のような「文法事項、第三者」の課題文となる。これら2種類の文は、「お一になる」という尊敬表現と「一れる・られる」という尊敬表現が重複して用いられているという点で誤った表現である。しかし、どちらも尊敬語であることから、待遇の対象は正しい文の場合と同じ山田先生と佐藤先生であると容易に類推できる。従って、人間関係の把握の仕方は正しいが、文法形式が間違っている文である。

また、「自己・身内敬語、非第三者」の誤文である「私は、昨日、3時間本をお読みにになりました。」の下線部は、文法的には正しいが、待遇の対象が被験者自身となっている点が人間関係の把握の上で間違っている。一方、「自己・身内敬語、第三者」の誤文である「私の父は、車を買うことをお決めになりました。」は、敬語的一人称である「私の父」に敬語を用いているという点で間違った表現である。この文中の主語、つまり待遇の対

象を「自己・身内敬語、非第三者」の誤文の主語と同じ「私」にした「私は車を買うことをお決めになりました。」という文は、待遇の対象が「私」となり、「自己・身内敬語、非第三者」の誤文と同様の表現となる。そのため、「私」の代わりに敬語的には同じ一人称に属する「私の父」を第三者とし、表1のような課題文を作成した。

最後に、「他者敬語」の課題文としては、待遇の対象が「非第三者」の場合には「山田先生、今朝、コーヒーを飲みましたか。」を、また、待遇の対象が「第三者」の場合には「その写真は、山田先生が撮りました。」などを作成した。これら2種類の文は、尊敬語を用いて待遇すべきである山田先生を丁寧語のみで待遇しているという点で不適切な文とみなした。したがって、この文を正しい表現であると判断した回答に対しては、不十分な訂正として取り扱った。謙譲語の訂正課題文についても、表1に示したように同様に作成した。

なお、日本語母語話者の間にも誤用が増加しつつある尊敬語の「ご一される」、「ご一になられる」、「ご一してください」、「ご一していただく」については、課題文として取り上げなかった。

3. 結果

訂正を得点化して分析した。得点は、誤った訂正を0点、不十分な訂正を1点、正しい訂正を2点とした。また、採点の基準は、全課題および全被験者で統一した。

3.1. 尊敬語の訂正課題に関する分析と考察

尊敬語の得点の平均値と標準偏差は、図1に示した通りである。母語（中国語と韓国語）、誤りの種類（文法事項、自己・身内敬語、他者敬語）、および待遇の対象（非第三者と第三者）をめぐる $2 \times 3 \times 2$ による分散分析を行った。母語については、被験者間分析、誤りの種類および待遇の対象については、被験者内の反復測定である。分析の結果、母語の主効果は有意ではなかった [$F(1,46)=1.99, p<.17$]。一方、誤りの種類の主効果は有意であった [$F(2,92)=14.89, p<.0001$]。待遇の対象の主効果は有意ではなかった [$F(1,46)=0.19, p<.67$]。また、3つの変数の交互作用については、母語と待遇の対象の交互作用のみが有意であった [$F(1,46)=4.03, p<.05$]。その他の要因間の交互作用は有意ではなかった。

母語と待遇の対象の交互作用が有意であったので、これらの要因の影響をさらに詳細に検討するために、誤りの種類別に母語（中国語と韓国語）と待遇の対象（非第三者と第三者）をめぐる 2×2 の分散分析を行った。まず、文法事項については、母語の主効果 [$F(1,46)=0.69, p<.41$]、および待遇の対象の主効果 [$F(1,46)=0.01, p<.91$] は有意ではなかった。両者の交互作用 [$F(1,46)=1.39, p<.25$] も有意ではなかった。従って、尊敬語の文法事項の習得においては、非第三者の場合も第三者の場合も、中国語系と韓国語系の間に差はないと言える。次に、自己・身内敬語については、母語の主効果 [$F(1,46)=5.28, p<.05$] が有意であった。待

遇の対象の主効果 [$F(1,46)=4.00, p<.06$] には傾向性がみられた。両者の交互作用は有意ではなかった [$F(1,46)=0.00, p<.95$]。母語の主効果が有意であったことから、待遇の対象別にさらに詳しく見てみると、非第三者待遇 [$F(1,46)=4.98, p<.05$] および第三者待遇 [$F(1,46)=4.49, p<.05$] とともに、中国語系と韓国語系の間に有意差があり、どちらも韓国語系の方が、得点が高かった。また、他者敬語では、母語の主効果 [$F(1,46)=0.00, p<.97$]、および待遇の対象の主効果 [$F(1,46)=1.55, p<.22$] は有意ではなかった。しかし、両者の交互作用は有意であった [$F(1,46)=8.46, p<.01$]。これは、図1のように、非第三者待遇のときには韓国語系の方が得点が高いのに対して、第三者待遇のときには中国語系の方が高くなっているためであると思われる。

さらに、全体として見た場合に、誤りの種類の主効果が有意であったことから、どの種類の敬語表現上の誤りの訂正がより難しかったかを検討するために、3種類の誤りの種類についてさらに詳しく検討したところ、文法事項と自己・身内敬語の間 [$F(1,46)=49.64, p<.0001$]、および自己・身内敬語と他者敬語の間 [$F(1,46)=5.19, p<.05$] に有意な差が認められた。全体として、他者敬語、自己・身内敬語、文法事項の順に得点が高かった。

3.2. 謙讓語の訂正課題に関する分析

謙讓語の得点の平均値と標準偏差は、図2に示した。尊敬語の場合と同様に、母語（中国語と韓国語）、誤り

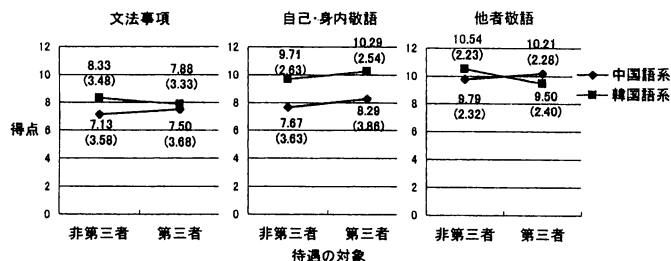


図1 尊敬語の訂正課題の得点の平均
注: 得点は各項目12点満点, 括弧内は標準偏差。

の種類（文法事項、自己・身内敬語、他者敬語）、および待遇の対象（非第三者と第三者）をめぐる2×3×2の分散分析を行った。その結果、母語の主効果 [$F(1,46)=0.03, p<.87$] は有意ではなかった。一方、誤りの種類の主効果 [$F(2,92)=31.06, p<.0001$] は有意であった。待遇の対象の主効果も有意であった [$F(1,46)=123.43, p<.0001$]。誤りの種類と待遇の対象の交互作用も有意であった [$F(2,92)=9.48, p<.001$]。その他の要因間の交互作用は有意ではなかった。従って、中国語系と韓国語系とで謙讓語の習得の度合いに差はないと言える。

次に、尊敬語の場合と同様に、誤りの種類別に母語（中国語と韓国語）と待遇の対象（非第三者と第三者）をめぐる2×2の分散分析を行った。まず、文法事項に関しては、母語の主効果 [$F(1,46)=0.60, p<.45$] は有意ではなかったが、待遇の対象の主効果 [$F(1,46)=28.07, p<.0001$] は有意であった。具体的には、非第三者の方が第三者よりも得点が高かった。両者の交互作用 [$F(1,46)=0.57, p<.45$] は有意ではなかった。従って、謙讓語の文法事項については、中国語系も韓国語系も同様に、待遇の対象が第三者の場合の方が非第三者の場合よりも習得が困難であるという結果であった。

自己・身内敬語については、母語の主効果 [$F(1,46)=0.21, p<.65$] は有意ではなかったが、待遇の対象の主効果 [$F(1,46)=71.97, p<.0001$] は有意であった。両者の交互作用は有意であった [$F(1,46)=4.42, p<.05$]。これは、図2に示したように、待遇の対象が

非第三者のときには韓国語系の方が得点が高かったのに対して、第三者の場合には中国語系の方が高かったためであると考えられる。さらに、待遇の対象別に詳しく検討すると、非第三者待遇 [$F(1,46)=0.27, p<.61$] および第三者待遇 [$F(1,46)=1.72, p<.20$] とともに、中国語系と韓国語系間に有意差はなかった。このことから、自己・身内敬語の習得の度合いは、待遇の対象が非第三者の場合も第三者の場合も中国語系と韓国語系間に差はなく、第三者の方がより困難であった。

また、他者敬語では、母語の主効果 [$F(1,46)=1.38, p<.25$] は有意ではなかった。一方、待遇の対象の主効果 [$F(1,46)=53.22, p<.0001$] は有意で、非第三者の方が第三者よりも得点が高かった。両者の交互作用は有意ではなかった [$F(1,46)=0.34, p<.56$]。従って、中国語系も韓国語系もともに、待遇の対象が非第三者よりも第三者の場合の方が、習得するのに困難であると考えられる。

さらに、誤りの種類の主効果が有意であったことから、この点について詳しく検討したところ、文法事項と自己・身内敬語の間 [$F(1,46)=26.14, p<.0001$]、および自己・身内敬語と他者敬語の間 [$F(1,46)=58.62, p<.0001$] に有意な差があった。全体として、他者敬語、文法事項、自己・身内敬語の順に得点が高かった。

3.3. 文法事項に関する分析

複雑な人間関係を考えた上で一つの適切な表現形式を選ばなくてはならないことは、日本語学習者にとっては文法形式よりもむしろ難しいと言われている（平林・浜、

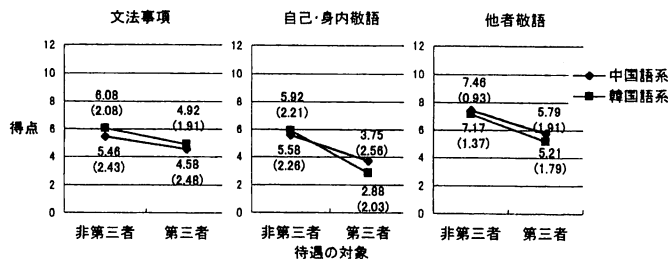


図2 謙讓語の訂正課題の得点の平均
注：得点は各項目8点満点、括弧内は標準偏差。

1988)。しかし、本研究では、文法事項の訂正課題の得点よりも、人間関係の把握に関する他者敬語の得点の方が、尊敬語と謙譲語のどちらの場合も、中国語系、韓国語系ともに高かった。そこで、特にどのような表現が習得する上で難しいのかを明らかにするために、文法事項についてより詳細に分析を行った。分析の対象とする敬語に接続する動詞および敬語の交替形式（林，1999）に用いられている動詞を、五段活用動詞と一段活用動詞の2種類に分けた。これらはそれぞれ、尊敬語ならば(1)「一れる・られる」、(2)「お一になる」、(3)「いらっしゃる」のような交替形式の敬語表現の3種類、また謙譲語の場合には、(1)「お一する」、(2)「何う」のような交替形式の敬語表現の2種類で構成されている。

3.3.1. 尊敬語

母語（中国語と韓国語）、動詞の活用（五段と一段）、および敬語表現（「一れる・られる」、「お一になる」、交替形式の敬語）をめぐる $2 \times 2 \times 3$ の反復測定による分散分析を、待遇の対象が非第三者の場合と第三者の場合とで別々に行った。

まず、非第三者については、母語の主効果 [$F(1,46) = 1.40, p < .24$]、および動詞の活用の主効果 [$F(1,46) = 0.46, p < .50$] は有意ではなかったが、敬語表現の主効果は有意であった [$F(2,92) = 12.98, p < .0001$]。また、母語と敬語表現の交互作用 [$F(2,92) = 5.44, p < .01$]、および動詞の活用と敬語表現の交互作用 [$F(2,92) = 10.19, p < .0001$] が有意であった。その他の要因間の交互作用は有意ではなかった。具体的には、中国語系では得点が高い順に、「一れる・られる」($M = 1.69$)、「お一になる」($M = 1.17$)、交替形式の敬語 ($M = 0.71$)、韓国語系も同様に、「一れる・られる」($M = 1.52$)、「お一になる」($M = 1.33$)、交替形式の敬語 ($M = 1.31$) の順に高かった。つまり、中国語系にとっても韓国語系にとっても、非第三者に対して用いる尊敬表現のうち最も簡単であるのは「一れる・られる」であった。

母語と敬語表現の交互作用、および動詞の活用と敬語表現の交互作用が有意であったことから、待遇の対象が

非第三者の場合について、五段動詞と一段動詞を別々に、敬語表現ごとの母語の影響をさらに詳しく分析した。その結果、五段動詞の「一れる・られる」 [$F(1,46) = 1.60, p < .22$] と「お一になる」 [$F(1,46) = 0.09, p < .77$] には中国語系と韓国語系間に有意な差はなかった。しかし、交替形式の敬語 [$F(1,46) = 6.18, p < .05$] には、中国語系と韓国語系間に有意な差があり、韓国語系 ($M = 1.58$) の方が中国語系 ($M = 0.92$) よりも得点が高かった。次に、一段動詞の場合には、五段動詞と同様に、「一れる・られる」 [$F(1,46) = 0.00, p < 1.00$] と「お一になる」 [$F(1,46) = 0.76, p < .39$] は、中国語系と韓国語系間に有意な差はなかった。交替形式の敬語 [$F(1,46) = 3.95, p < .06$] には、中国語系と韓国語系間に韓国語系 ($M = 1.04$) の方が中国語系 ($M = 0.50$) よりも得点が高い傾向性が見られた。

次に、待遇の対象が第三者の場合について検討した。母語の主効果 [$F(1,46) = 0.14, p < .72$]、および動詞の活用の主効果 [$F(1,46) = 1.43, p < .24$]、敬語表現の主効果 [$F(2,92) = 1.48, p < .24$] のいずれも有意ではなかった。各要因間の交互作用のうち有意であったのは、動詞の活用と敬語表現の交互作用 [$F(2,92) = 3.42, p < .05$] のみで、その他の要因間の交互作用は有意ではなかった。つまり、待遇の対象が第三者の場合には、各敬語表現に対する母語の影響は見られないという結果であった。

以上のように、尊敬語については、待遇の対象が非第三者の場合には全体としては母語の主効果は有意ではないものの、個々の表現別に検討すると、五段活用動詞も一段活用動詞も交替形式の敬語に、尊敬語の習得に対する母語の影響が見られた。具体的には、交替形式の敬語の習得の度合いは、五段活用動詞も一段活用動詞も、韓国語系の方が高かった。それに対して、待遇の対象が第三者の場合には、いずれの場合にも母語の影響は見られなかった。また、尊敬語を非第三者に対して用いる場合、中国語系にとっても韓国語系にとっても最も得点が高かったのは「一れる・られる」で、次が「お一になる」、

最も得点が低かったのは交替形式の敬語であった。一方、尊敬語を第三者に対して用いる場合には敬語表現間に有意な差はなかった。

3.3.2. 謙讓語

尊敬語の場合と同様に、母語（中国語と韓国語）、動詞の活用（五段と一段）、および敬語表現（「おーする」、交替形式の敬語）をめぐる $2 \times 2 \times 2$ の反復測定による分散分析を、待遇の対象が非第三者の場合と第三者の場合とで別々に行った。

まず、非第三者については、母語の主効果 [$F(1,46) = 0.91, p < .35$] は有意ではなかったが、動詞の活用の主効果 [$F(1,46) = 7.93, p < .01$] は有意であった。具体的には、中国語系は五段活用動詞 ($M = 1.50$) の方が一段活用動詞 ($M = 1.23$) よりも得点が高かった。同様に、韓国語系も、五段活用動詞 ($M = 1.61$) の方が一段活用動詞 ($M = 1.44$) よりも得点が高かった。つまり、中国語系にとっても韓国語系にとっても、五段活用動詞の方が習得しやすいということである。また、敬語表現の主効果 [$F(1,46) = 0.80, p < .38$] は有意ではなかったが、敬語表現と動詞の活用の交互作用 [$F(1,46) = 4.16, p < .05$] は有意であった。その他の要因間の交互作用は有意ではなかった。

次に、待遇の対象が非第三者の場合における各敬語表現に対する母語の影響について、五段動詞と一段動詞を別々に詳しく分析した。その結果、五段動詞の「おーする」 [$F(1,46) = 0.04, p < .85$] と交替形式の敬語 [$F(1,46) = 1.21, p < .28$] には、中国語系と韓国語系の間有意な差はなかった。一方、一段動詞の場合も五段動詞と同様に、「おーする」 [$F(1,46) = 3.20, p < .08$] と交替形式の敬語 [$F(1,46) = 0.00, p < 1.00$] の間に差はなかった。このことは、謙讓語を非第三者に対して用いる場合の文法事項の習得には、五段動詞と一段動詞、また「おーする」と交替形式の敬語のいずれに対しても、母語の影響がないことを示唆している。

また、待遇の対象が第三者の場合には、母語の主効果 [$F(1,46) = 0.27, p < .61$] は有意ではなかったが、動

詞の活用の主効果 [$F(1,46) = 8.36, p < .01$] は有意であった。具体的には、中国語系は五段活用動詞 ($M = 1.31$) の方が一段活用動詞 ($M = 0.98$) よりも、また韓国語系も、五段活用動詞 ($M = 1.38$) の方が一段活用動詞 ($M = 1.09$) よりも得点が高かった。つまり、中国語系にとっても韓国語系にとっても、謙讓語を第三者に対して用いる場合の表現としては、五段活用動詞の方が習得しやすいということである。さらに、敬語表現の主効果 [$F(1,46) = 26.90, p < .0001$] も有意であった。具体的には、中国語系は交替形式の敬語 ($M = 1.46$) の方が「おーする」 ($M = 0.84$) よりも、韓国語系も同様に交替形式の敬語 ($M = 1.46$) の方が「おーする」 ($M = 1.01$) よりも得点が高かった。また、動詞の活用と敬語表現の交互作用 [$F(1,46) = 4.25, p < .05$] も有意であった。その他の要因間の交互作用は有意ではなかった。

以上のように、謙讓語においては、待遇の対象が非第三者の場合には、いずれの条件においても謙讓語の習得の度合いに母語の影響はなかった。また、動詞の活用は、中国語系も韓国語系も、五段活用動詞の方が一段活用動詞よりも習得しやすいようであった。敬語表現については、「おーする」も交替形式の敬語も、難しさは同じであるという結果であった。一方、待遇の対象が第三者の場合も、謙讓語の習得の度合いに母語の影響はなかった。動詞の活用も、非第三者の場合と同様に、中国語系も韓国語系も五段活用動詞の方が習得しやすいようであった。敬語表現については、中国語系も韓国語系も、交替形式の方が「おーする」よりも得点が高かった。

4. 考察

日本語の敬語と韓国語の敬語は、ともに尊敬語、謙讓語、丁寧語という3分類からなる敬語体系を有していると言う点で大変似通っている。これに対して、中国語は、日本語のような体系的な敬語をもたないと言われている。そのため、日本語の敬語習得においては、韓国語系日本語学習者の方が中国語系日本語学習者よりも有利であると予測された。

ところが、分析の結果、本研究の被験者である上級レベルの日本語学習者において、韓国語系の方が中国語系よりも有意に得点が高かったのは、尊敬語の自己・身内敬語の訂正課題のみであった。同じ自己・身内敬語でも、謙讓語には母語による違いはなかった。また、自己・身内敬語と同様に、人間関係把握の習得の度合いを問う課題である他者敬語についても、尊敬語と謙讓語のどちらも母語による違いはなかった。文法事項の習得も全体としては母語による違いはなかった。つまり、全体的に見て、日本語能力が上級レベルになると、母語の持つ敬語体系の違いは、目標言語である日本語の敬語習得の度合いにあまり影響しないということが明らかになった。

また、中国語系も韓国語系もともに、人間関係の把握に関する他者敬語の得点の方が、文法事項よりも有意に高かった。中国語系については、文法事項よりも人間関係の把握の仕方の方が難しいという指摘(母, 1999)もあるが、本研究では、母語に敬語体系を持つ韓国語系と同様に、文法事項の得点の方が低いという結果であった。

文法事項をより詳細に検討すると、敬語表現の主効果が有意であったのは、尊敬語を非第三者に対して用いる場合と、謙讓語を第三者に対して用いる場合であった。尊敬語を非第三者に対して用いる場合には、中国語系にとっても韓国語系にとっても、「一れる・られる」が最も得点が高かった。謙讓語を第三者に対して用いる場合には、交替形式の敬語の方が「おーする」よりも得点が高かった。これは、尊敬語の「おーになる」と謙讓語の「おーする」が形の上でよく似ているため、両者を混同した結果、尊敬語の「おーになる」と謙讓語の「おーする」の得点が最も高くはならなかったのだと考えられる。日本語母語話者においても、謙讓語の「おーする」を尊敬語として「社長はいつもこのホテルをご利用するそうです。」のように使用する傾向が観察されており、敬語システムを揺るがしかねないとして、現在最も憂慮すべき変化であると捉えられている(菊地, 1997)。つまり、日本語母語話者自身にとっても難しくなっている「おーになる」と「おーする」の区別は、日本語能力が

かなり高いレベルにある本研究の被験者においても難しかったのだと考えられる。

本研究の結果は、2つの点で、第二言語習得研究に対する一般的な示唆を含んでいる。第1に、第二言語習得の誤答分析において以前より言われているように(e.g., Bailey, Madden & Krashen, 1974; Dulay & Burt, 1974), 学習者の第1言語(母語とは限らない)と関係なく誤答が生じているとする主張と一致する。とりわけ、本研究の被験者のように、ある程度、学習の目標言語の習得が進むと、第1言語(本研究では母語と同じ)の影響は、極めて弱くなるといえるのではなからうか。その意味で、Seliger (1984)のいう「第二言語習得の普遍的プロセス (processing universals in second language acquisition)」があり、本研究の敬語の習得における中国語と韓国語の母語話者においても、母語の違いが見られなかったと考えられよう。第2に、一般的な推論として、第一言語と学習の目標言語とが類似しているほど、習得がされやすいという考え方がある。しかし、時として非常に類似性の高いものは、違いのあるものよりもより克服しがたいという観察もあり、言語間の類似性が、そのまま習得の難易度と関係するとするのは、短絡的な議論ではなからうか。おそらく、第二言語の学習の初期段階では、母語からの干渉(inhibition)と促進(acceleration)が顕著に見られるであろうが、徐々に母語の影響から離れた普遍的な獲得過程が見られるようになるのではなからうか。

引用文献

- 安秉禧 (1981). 敬語の対照言語学的考察. 宮地裕他. 講座日本語学9 敬語史. 明治書院, 88-113.
- BAILEY, N., MADDEN, C. & KRASHEN, S.D. (1974). Is there a natural sequence in adult second language acquisition? *Language Learning*, 24, 235-243.
- バルバラ・ピッツィコーニ (1997). 待遇表現から見た日本語教科書—初級教科書五種の分析と批判—. くらしお出版.
- 母育新 (1999). 待遇表現の習得における中国人学習者

- の問題点と教科書が与える影響. 平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 165-170.
- DULAY, H.C. & BURT, M.K. (1974). Natural sequences in child second language acquisition. *Language Learning*, 24, 37-53.
- 林四郎 (1999). 敬語の役目はなくならない. 月刊言語, 338, 34-40.
- 平林周祐・浜由美子 (1988). 外国人のための日本語例文シリーズ10 敬語. 荒竹出版.
- 彭国躍 (1999). 中国語に敬語が少ないのはなぜ?. 月刊言語, 338, 60-63.
- 徐正洙 (1978). 韓国現代敬語法の推移—最近の設問調査をもとにして—. 朝鮮学報, 89, 1-26.
- 菊地康人 (1997). 敬語. 講談社学術文庫.
- 興水優 (1977). 中国語における敬語. 大野晋・柴田武. 岩波講座日本語4 敬語. 岩波書店, 273-300.
- 森下喜一・池景來 (1992). 日韓語対照 言語学入門. 白帝社.
- 荻野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松 (1990). 日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照. 朝鮮学報, 136, 1-51.
- SELIGER, H.W. (1984). Processing universals in second language acquisition. In Eckman, F, Bell, L & Nelson, D (Eds.). *Universals of second language acquisition*, pp. 36-47. Rowley, MA: Newbury House.
- 梅田博之 (1987). 韓国の敬語. 月刊言語, 187, 32-37.

SUMMARY

The acquisition of honorific expressions in the Japanese language is related to the cultural knowledge of Japanese interpersonal relationships and to the technical knowledge of Japanese grammar. Honorific expressions include the uses of exalting terminology, humble terminology and the use of grammar changes to infer the honoring effect. The purpose of this study was to assess the effects of mother tongue Chinese and Korean languages on the acquisition of Japanese honorific expressions. The students for this study were native Chinese and Korean speakers with advanced Japanese language abilities. Because the Korean language has a systematic procedure for honorific expressions, similar to the Japanese language, it was hypothesized that native Korean speakers would acquire Japanese honorific expressions more easily than native Chinese speakers.

This hypothesis held for only one criterion. The native Korean speakers obtained higher scores for the proper use of exalted terms pertaining to self and family members than the native Chinese speakers. Both groups scored higher in the proper use of honorific terms for others, than in making grammar changes to effect the honorific expression for

others. One of the test conditions involved the editing of sentences which required humble terms for the object of politeness in the third person. The scores for both groups of participants reflected a similar level of difficulty with this criterion. Further analyses of the types of honorific expressions yielded these findings: 1) the highest scores obtained by both groups were related to exalted expressions using/*reru* and *-rareru*/; 2) the second highest scores were related to the use of/*o-ninaru*/; and 3) the lowest scores were related to the use of exalting verbs. In regard to the criteria for humbling expressions, the scores for both groups were higher in the use of humble terms than in the grammatical formulation of humble verbs using/*o-suru*/. Generally, the native Korean and Chinese languages exhibited similarities in the uses of exalting and humbling terminology for honorific expressions; having difficulties with the grammatical changes needed to effect the humbling expression for third person politeness. It was concluded that the mother tongue has few effects on the acquisition of honorific expressions for advanced Japanese language skills.